

# 白金霞

3月号



平成28年3月発行

第61号

白金葭定例句会案内&拡大句会のお知らせ\*

四月十五日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題・梨の花、春眠

五月二〇日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題・初夏、麦飯

六月一七日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題・柚の花、鶺鴒

\*六月三〇(木) 11:30 ~ 15:30 拡大句会(銀座らん月)

四月十五日分兼題(梨の花、春眠) 参考句

梨の花郵便局で日が暮れる 有馬朗人

梨咲くと葛飾の野はとの曇り 水原秋櫻子

郷関を出づる砂利道梨の花 矢野さとし

青天や白き五弁の梨の花 原石鼎

靴跡に水沁み出して梨の花 柳生正名

花梨老樹に赤児抱きつく家郷かな 金子兜太

みづいろの春眠くれなゐの永眠 石倉夏生

入院の夫に春眠忘れけり 鈴木緑風

春眠のさめぎはに聞く鳥のこゑ 岸本由香

春眠や底無し沼へ沈む夢 石橋邦夫

春眠や青木繁がこちら向く 野田遊三

老人の遊びに春の眠りあり 今井杏太郎

春眠のわが身をくぐる浪の音 山口誓子

金の輪の春の眠りにはひりけり 高浜虚子

月例句会報(16/3/18 7名欠4(お水取り、鳥曇))

飯田孝三

青い眼の僧も走はせたりお水取

諸鹿の闇に瞠<sup>みひらく</sup>くお水取

筑波嶺や尖<sup>とがり</sup>り二つ鳥曇

あと一しづく島並鳥曇り

桃咲いて日向ぼっかり昭和かな

増田陽一

寒鯉の醒めて輪郭定まらず

水取りや古き旅籠の日吉館

鳥雲に少女はすべて端末に

翳深く白鳥残る沼の春

鹿の瞳の闇に潜みてお水取

光成高志

お松明スマホの明り点々と

聲明やサンゲサンゲとある修二会

二月堂聲明籠る修二会かな  
鳥曇ジェット旅客機雲を切り  
鳥曇ピカソの目鼻点四つ

庭の花束ねて見舞ふ鳥曇

内陣の洩れ灯女人の修二会の座  
目鼻なき島の地蔵や鳥曇  
肢体なす浜の流木春の雨

修二会更け休息に出る僧拌む

門川に鯉はねる音春の宵  
お水取誰も善男善女かな  
雛の間に三代の雛眠る  
鳥曇骨折り損のことばかり  
水温む顔みるだけの姉を訪ふ  
はちみつ湯両手で包み春の風邪

光  
みち

吉羽多美子

倉田紀子

沈めゐる砥石泡吹く寒もどり  
嫁がせて二人となりし紙雛  
蟄虫<sup>ちゅちゅう</sup>を吐き出しし日や鳥曇  
手賀沼の柳ふかるる鳥曇

松村幸一

鬼瓦さびしき日なり鳥曇に  
春愁か人形焼のけふの顔  
ほのほ呑む闇の深さも修二会かな  
なみだぐみ歌舞伎座出づる鳥曇  
絵本開けば春愁に泣く夢二かな

武者昭七

春の海弁財天の琵琶の音（江の島）  
大松明弾け飛ぶ音二月堂  
雪残る山越えて今鳥帰る  
若狭井の水に灯るや春の星  
雪女郎の行方ゆかしや雪解水

浅野正美

春寒し庭師の使う電気鋸

選句結果 (数字は入選数 左添書きは添削句)

卒園式先生親の目に涙  
球児の声土曜の校庭鳥曇

5 鳥曇大仏様は修理中

敦子

火の帯と火の粉飛び散るお水取り  
一人づつ和紙に包みて雛納め  
聞きなれぬ鳥の声して鳥曇

4 鬼瓦さびしき日なり鳥雲に  
4 目鼻なき島の地藏や鳥曇  
3 諸鹿の闇に睦みらくお水取  
3 春愁か人形焼のけふの顔  
3 嫁がせて二人となりし紙雛

幸一  
孝三  
幸一

青木啓泰

2 鳥曇ピカソの目鼻点四つ  
2 鳥曇ピカソの皿に目が二つ  
2 翳深く白鳥残る沼の春

高志

ヒシクイは明日はお発ちか鳥曇  
登呂を出て安倍川越える春の月  
焼津にはトンボマグロもあるという  
着所寝増えし女房をまたぎけり  
眉剃ってバレンタインの女かな

2 沈めゐる砥石泡吹く寒もどり  
2 鳥曇骨折り損のことばかり  
2 肢体なす浜の流木春の雨  
2 ほのほ呑む闇の深さも修二会かな  
1 手賀沼の柳ふかるる鳥曇

陽一  
紀子  
多美子  
みち  
幸一  
紀子

田宮敦子

1 青い眼の僧も走はせたりお水取

孝三

鳥曇大仏様は修理中  
若者と競って歩く鳥曇  
鳥曇眠気催す読書かな  
アングルは築地塀なり梅香る

1 水取りや古き旅籠の日吉館  
1 内陣の洩れ灯女人の修二会の座  
1 雪残る山越えて今鳥帰る  
1 鳥曇ジェット旅客機雲を切り  
1 若狭井の水に灯るや春の星

陽一  
みち  
昭七  
高志  
昭七

1 聲明やサンゲサンゲとある修二会

1 なみだぐみ歌舞伎座出づる鳥曇

1 水温む顔みるだけに姉を訪う

1 水温む顔みるだけの姉を訪ふ

1 焼津にはトンボマダグロもあるという

1 絵本開けば春愁に泣く夢二かな

1 聞きなれぬ鳥の声して鳥曇

1 二月堂聲明籠る修二会かな

1 寒鯉の醒めて輪郭定まらず

1 門川に鯉はねる音春の宵

1 庭の花束ねて見舞ふ鳥曇

1 卒園式先生親の目に涙

1 ヒシクイは明日はお発ちか鳥曇

1 球児の声土曜の校庭鳥曇

1 着所寝増えし女房をまたぎけり

1 お水取誰も善男善女かな

1 アングルは築地塀なり梅香る

1 はちみつ湯両手で包み春の風邪

1 大松明弾け飛ぶ音二月堂

1 桃咲いて日向ぼっかり昭和かな

1 雛の間に三代の雛児や眠る

1 雛の間に三代の雛眠る

1 火の帯と火玉飛び散るお水取り

高志

幸一

多美子

啓泰

幸一

正美

高志

陽一

多美子

みち

正美

啓泰

正美

啓泰

多美子

敦子

紀子

昭七

孝三

多美子

正美

火の帯と火の粉飛び散るお水取り

筑波嶺や尖とんがり二つ鳥曇

若者と競つて歩く鳥曇

登呂を出て安倍川越える春の月

あと一しづく鳥並鳥曇り

鳥曇眠気催す読書かな

眉剃つてバレンタインの女かな

一人づつ和紙に包みて雛納め

お松明スマホの明り点々と

春寒し庭師の使う電気鋸

雪女郎の行方ゆかしや雪消水

雪女郎の行方ゆかしや雪解水

鹿の瞳の闇に潜みてお水取

蟄虫ちっちゃうを吐き出しし日や鳥曇

修二会更け休息に出る僧拌む

### 一句鑑賞

#### 鳥曇大仏様は修理中

敦子

「鳥曇水天宮は建替え中」「春の雨激し中門はリフォーム中」これは直近の私の作。掲句が出たので即頂いた。何故って、鳥籠のように囲われた大仏様を見てがっかりするよりも見上げた鳥曇の空と山、きつと鎌倉高徳院の大仏に違いないが、その視野が大きいからだ。

孝三

敦子

啓泰

孝三

敦子

啓泰

正美

高志

敦子

昭七

陽一

紀子

みち

光成高志

今は囲いが取り払われ修理が終わった大仏さまはやはり美男でおわし、うつむき加減にお坐りになって我々庶民を見給うのだ。

### 鬼瓦さびしき日なり鳥雲に

幸一

「鳥雲に」は「鳥雲に入る」の仲春の季語の省略形である。秋に來た鳥が春に北方に帰ってゆく姿を指している。高く遙かな雲間にかくれていくあわれをいう美しい季語である。その様を詠ったり、その頃の生活や心象まで句にできる雪月花につぐ季語である。掲句は海や山や川ではなく家の鬼瓦と取り合わせたところに新しみがある。鬼瓦になったつもりで詠んでいることも地上の人間の生活感があっていいと思う。

### 鳥雲に少女はすべて端末に

陽一

鳥雲に入る頃、地上の少女たちはみな電車の中でインターネットの端末であるスマホを握って戯れている。これも現代風俗であり、芭蕉の時代決して見られなかった光景である。作者の思いはどうであらうか。

### 若狭井の水に灯るや春の星

昭七

二月堂の南側石段を下りた所に、閑伽井屋あかいやがあり中に井戸がある。これを若狭井という。三月十二日の深夜、この若狭井から二月堂の本尊にお供えするお香水こうすいを汲み上げる儀式がお水取りである。掲句は若狭井の水面に春の星が映っているのが恰も水に灯る

灯明のように思われるという。いや若狭井に灯りが灯され香水を汲むお水取りの闇の空には春の星が輝いていることだという大景と読めないか。その場合には「水を灯すや」として二句一章の取り合わせにする。後者の方がいい句になると思う。

### 内陣の洩れ灯女人の修二会の座

みち

内陣には須弥壇が据えられ、本尊の十一面観音像が絶対秘仏として納められている。そこは格子戸で囲まれ練行衆の法会の場合である。外陣は一段低い廊下になっており、須弥壇と局の格子戸で囲まれている。ここは女人禁制の場であるので、女人は内陣の洩れ灯のみの暗い局に座って祈るのである。誓子先生の「修二会の栈女人の目女人の目」の句がある所以である。

### 一句鑑賞

増田陽一

### 諸鹿の闇に瞳みひろくお水取

孝三

お水取りと鹿という主題の句は世に多いと思うけれど、掲句の表現には驚嘆した。『諸鹿』も思い切った表記であらうし、『瞳みひろく』と、省略された一言で凝縮した表現がなされている。松明や喚声の中、二月堂のまわりで闇の中に眠れずにうごめいている筈のたくさん鹿の気配が感じられるようである。

## お松明スマホの明り点々と

高志

高志さんはわざわざ奈良までお水取を見に行かれたのである。その実見の一つが何と、「スマホの明り」であるとは。僕にもこの『お水取り』の見物は一つの憧れだけれど、現実はこちらであると充分想像できる現今の風俗である。『スマホ』などという粗野な語が俳句に馴染むかどうか躊躇する前に、見てしまったものは仕方が無い、と作者はその体験を生かしたのである。こんな『修二会』の句は今までになかった。

## 鬼瓦さびしき日なり鳥雲に

幸一

屋敷の屋根の最も高いところで睨みを利かせているけれど、その鬼瓦がさびしい、と。詩人は自らの心情を投影して何にでも、淋しい、と言ふけれど虚空に独り居る鬼瓦の淋しさは大人のそれであろう。そしてユーモラスな句としても読めるのである。周りに騒いでいた鳥たちが雲に消えてしまったせいでもある。

## 雪残る山越えて今鳥帰る

昭七

『雪残る山越え』からは越後から日本海に抜けてシベリヤに帰る鳥のコースが連想される。昔はその山の尾根に霞網を仕掛けて莫大な数のツグミ類が捕獲された。泉鏡花の『眉かくしの霊』では、木曾山中の宿で、たしか五羽もの鶉が焼かれた膳を見て、旅人がもっと食べたいと所望するのであったか。当時の乱獲ぶりが

偲ばれるのである。それでも自然が豊かだったので鶉は減らなかつた。戦後は霞網は禁止され、鳥たちの多くは無事に帰るのである。この『今』の措辞がよく効いて鳥の動きを生き生きと伝えている。

## 目鼻なき島の地蔵や鳥曇

みち

僻地に立つ石地蔵、流人の頃まで知っている古い地蔵が海からの風雨で摩滅している。それでも長い間空を見てきたので自然の動きを知悉していて、鳥の渡りを見守っている風情であろう。『島』という設定が古い地蔵に風土的な物語性を持たせている。

## 水温む顔見るだけの姉を訪ふ

多美子

姉上は寝たきりで、おそらく会話も不自由なのである。顔を見るだけでもと承知しながら訪ねて行くのだ。何だか僕にとつてもひと事ではないけれど、ここでは『水温む』の季語に僅かに安堵感があるのだが、句としての味はひであろう。

## 焼津にはトンボマグロもあると言う

啓泰

駿河湾にある焼津港は遠洋漁業の拠点であつて各種の鮪が上る。中でもビンチョウ鮪はビンナガ鮪はビンナガ、トンボ、コビンなどと異称があり、これらは胸鰭が長いことからきている。このトンボマグロという愛嬌のある呼称を生かして「あると言う」と噂のように暈かした手法が面白い。

## 一句鑑賞

飯田孝三

### 鳥曇大仏様は修理中

敦子

鎌倉は長谷観音の堂近き露坐の大仏。つい先日、拝観再会が報じられたが、掲句はまだ修理中。「鳥曇」は鳥帰る時分、よくみられる曇天、その鬱しい気分が本意。とりとめもなく、空漠、「花曇」よりムード性が濃い。大仏それも庄卷、露坐の存在感との照応が抜けている。修理中とて被いに隔てられても毫も損なわれな、むしろ何やら諧謔を醸し、面白い。「大仏様」がほのぼのと露霏<sup>あいう</sup>、いわばその音容の太みが臍。「露坐の大仏」だと具象錯綜して句にならない。

### 水取りや古き旅籠の日吉館

陽一

奈良、まづは「日吉館」を思う。老朽化して、先年取壊されたが、戦中戦後にかけて俳句との関わりが深い。関西在住の誓子、三鬼、多佳子等が屢籠つて、侃々諤々、句を磨いた。どれも俳の徒には懐かしい名だ。「俳句第二芸術」論が囂<sup>うご</sup>かしかった時代と重なる。陽一さんによると、鬼房も加わったことがあるそうだ。「水取り」はいわずもがな、東大寺二月堂に伝わる修二会の行の一つ、三月十三日午前二時を期し、良弁杉の下の開佃井屋のご香水を汲む。香水はその年の仏事に供され、ひろく濁世の諸病諸厄を払うと崇められる。

掲句は、若き日、兄事・私事した先達の姿を思い浮かべつつ、はたまた、眼間に繰り広げられる、仏の秘儀に青丹よし古き都を偲ぶのである。「菊の香や奈良には古き仏達」(芭蕉)と一脈通じるものがあるだろう。

幸一

春愁「か」のため息にも似た、軽い氣息が絶妙。焼型は共通だから、顔付きはみな一緒の筈、いや、その日のお天気、焼盤のご機嫌で氣色が変わる？ 焼き手の気分によっても・・・、それはそれ、すかさず呼応する「けふの」の抑揚がこころ憎い。手練、年輪の滲む一句である。韻きのよろしさも見逃せない。長音に配する力行単音の三連が巧まず「春愁」の情を深める。

### 嫁がせて二人となりし紙雛

紀子

お嬢さん家族と離れ住む老夫婦の桃の節句、「二人」はそれ自体、今では当たり前といえはそれまでだが、さにあらず。掲句は「紙」雛、すなわち臍である。居並ぶのは、きつと幼かったお嬢さん(達)が、いや、と一緒に拵えた、手製のお雛達かも知れない。過ぎし日々を懐かしく追憶する。それぞれの所作の一々までは甦る、まるで昨日のように・・・と、そうかなあ、「お二人とも、今では雛飾りを厭われるお齡、お手近な色紙で折り雛をしつらえ、昔を偲ばれる」。ふーむ、そうかも。



## 目鼻なき島の地蔵や鳥曇

みち

日本は島嶼の国、どの島の日溜でもお地蔵さんが滋顔を綻ばせ、人々をおまもり、こころ和ませてくださる。とはいえ、国生みの昔から積もる歳月、世々の雨風に晒され、目鼻立ちさえおぼろ。もったいなや、もったいなや。そういえば、津々浦々に満ちていた子供らの声も、この頃、とんと聞こえないなあ。上空雲覆い、鳥影ひとつ見えない。季語幹旋「鳥曇」が憎い、「や」の響きと相つて、いわぬの胸懷を一入<sup>ひとしほ</sup>深めるのである。

## 若狭井の水に灯るや春の星

昭七

東大寺二月堂におけるお水取りの一場面である。前出、陽一さんの句の鑑賞で述べたところだが、三月十二日深更、良弁杉の下の開伽井のご香水を汲む。真闇の秘儀も最中、壺中に星が燦めくのだ、それも春の星。詩の心眼でとらえた星影であり、み仏が垂れ給う久遠の恵みが映える一瞬の光芒であるかも知れぬ。お水取りが終わると、古都に本格の春がやって来る。

## 鳥曇ピカソの目鼻点四つ

高志

誰知らぬ者なき二十世紀画壇の巨匠である。それぞれ鼻肩の超傑作を思い浮かべよう。両目を縦横斜めにしてとくと御覧じあれ。なにも気を塞ぐことはない、大画伯は、キュビズムの始祖とやら、石版、彫刻、陶

器もやられ、はたまた絵面で組み立てたりもする。え？ちぐはぐ？？いやいや、その高邁・深淵なインヴィバレンスこそ崇高の誉れ。目鼻口、いや点だかの向々、五つ四つの数にや拘るまい。会場を出たら目薬をさして、緑の風に当たろう。え、どんより「鳥曇」、いやはやこれはこれは。それにしても「ゲルニカ」の悲惨のほども、今は昔だなあ。贅言多謝、「鳥曇」と「ピカソ」の配合は、けだし現代俳諧の極みとも思える一句である。

(出句一覽掲載順)

## 一句鑑賞

武者昭七

## 諸鹿の闇に瞠<sup>みくら</sup>くお水取

孝三

お水取りは夜の行事である。普段寝ている筈の鹿どももこの夜ばかりは寝ていられない。それほどの周囲の喧騒なのだ。(騒ぎのさまを実際に体験してこられた高志さんから伺った。)何事かと起き上がって火の方にぞろぞろ群れをなしてやってくる鹿ども。「諸鹿」とはそれをいうのであるうが面白い言い方だ。(諸人といういいかたから思いついたか。)「闇に瞠く」はそういう鹿どもの驚きと好奇心を見事にとらえた絶妙の表現。

## 目鼻なき島の地蔵や鳥曇

みち

荒涼たる風景である。現実の島ではあるまい。目も鼻も風浪に削り取られた地蔵の立ち姿。灰色の空。幻

想の賽の河原か。ひとには時にこんなさびしい風景をふと思ひ描いてしまふ瞬間というのがあるものなのだ。絵本開けば春愁に泣く夢二かな

幸一

春愁に泣きぬれているのは絵本の中の夢二の女である。それをあえて夢二自身ととらえたところに夢二の悲しみが出た。夢二に対する深い共感がにじむ句である。開いた絵本からゆつくりと春の悲しみが立ち昇るその前奏が字余りの初句である。

水温む顔見るだけの姉を訪ふ

多美子

出向いても言葉を交わすこともできなくなってしまう姉。それでもやはり会いに行くのである。それが姉妹というものなのだろうと、今鑑賞文を書きながら思う。僕も先ごろ似通った経験をしたから。この句初案は「見るだけに」であったのを「見るだけの」に改めた。さびしさと悲しみがよりはっきりと伝わってくる。一語の重さである。

嫁がせて二人となりし紙雛

紀子

実は「嫁がせる」という言い方に懐かしさを覚えたのである。いまはもうこんな言い方は滅んでしまった。そんな言い方しようものなら「ヒトをモノ扱いするな」と大騒ぎになろう。もちろんぼくにはこんな経験はないけれども嫁がせたあとの夫婦の安堵と寂しさは想像できる。僕の母は娘を三人「嫁がせ」たから。残った

二人は「紙雛」とはご冗談を。

一句鑑賞（60号）

飯田孝三

春大根の抱擁と断絶

陽一

大根は、そのものの他、引く、洗う、干すなどまつわる季語が豊富なように、生活の感興をそそる。春大根は秋遅く種をまき、春穫る、万物萌える春とともに、葉の緑を茂らせ、洗われて日に晒す白肌は鮮烈、仙人も目が眩み、墜落するありさま、おっと、これはホイットマンもフロイトも知らない、日本の遠い昔のはなし。さて「断絶」は、窮極、突如急速に減衰する謂いだろう、高柳重信の名作「身をそらす／虹の絶頂／処刑台」（※）を思い出す。これを凌ぐ作と思う。重信のそれは、俳句というより多行詩、戦後の時代が色濃く投影し、おどろおどろしく、艶に多弁。掲句は、身近に感じ、記紀万葉を辿る文芸の沃土を歩き、いのちの条理を衝く。寡言、深く蔵して普遍の詩情をたたえる。他に「バレンタインデー町ぢゅうの猫落着かず」、二月十四日は、あたかも猫の恋の盛り、バレンタインデーに狂騒する諸姉氏の顔が、まるで恋に身を棄す猫族の貌貌に見えてくる・・え、「時期尚早」？これはしたり、猫どももついでに駆られ急にそわそわ、眼を滾らせる図である。

※俳句のプロらは、暗に性の絶頂を主題とする一篇とみる。  
が、そういう過ぎるのはどうか。余談だが、それらも踏まえ、  
敗戦の残酷・悲惨を身に刻んだ時代を多角・多重的に嘆じた「青  
春悲傷詩」とみたい。

### 春の鳶ひとつ滑空伊良湖岬

高志

「鷹ひとつ見付けてうれしいらご岬」（芭蕉）『笈の小文』を踏まえる。芭蕉は久しぶりの杜国との再会を喜ぶ、逆境の杜国であれば、ここは「鷹」の他はありえまい。さて掲句は春の「鳶」、長閑な上空を悠々と飛ぶ。芭蕉の主情に対し、客観に徹し岬の大景をうたう。

「滑空」は、大和ことばでの描写もあるだろうが、誓子直伝の詠みぶり。「カックウ」の韻きと相まって、漂いゝの空をゆく舞い姿をまざと目に見せるのである。  
ハンガーに蛸干されるて孕み猫

みち

蛸はぐにやぐにやの塊が身ぐるみ引き伸ばされ、寒風に晒される。いやはや「ハンガーに」が如実。なるほど、関西では「風」を「いかのぼり」と呼ぶわけだ。幾百のタコが吹かれる干場の土を、新しい命を身こもる猫が、上目遣いに、重い腹をひきずり歩くのである。  
「あて」の軽妙なぬけつぷりが憎い。送りを入れぬ「孕猫」が目に見え、ペーソスを誘う。「猫孕む軒端干されて蛸の昼」（倣猿）

### 山笑ふ口に余りし塩むすび

多美子

「山笑ふ」は「春山澹冶にして山笑ふが如し」（郭熙『林泉高致』）からくる。山々が芽吹き、花綻び、明るい生気に満ちた、春山の装いを譬える。そうは云つても、こちら、口いっぱいおむすびを頬ばつては笑えないよ。最近では云わない「握飯」ならぬ「むすび」が手柄。「口」を「結ぶ」に通い（縁語、そのさまが見えてくる。さりげない「塩」がまた粋。知らんぷりでこぼすの俳諧が面白い。

### こころざし衰へし日や置炬燵

昭七

「こころざし」の語は、戦後とんと聞かない、が、人はそれぞれ志をもつ。ときに、ふと、こころざしの「衰へ」に気づきつつも、時を経て、紛れなき気の衰えにはたと驚く、そして、それを意に止めなかった日々のあれこれの思い起こすのだ。あの頃はまだ若かったなあ。「置炬燵」はとりも直さず、過ぎし、懐かしき日々の表象なのである。切れ字「や」があからさま、「の」がふさわしいのでは、「置炬燵」が目に入る。

### 路の臺思わぬところに二つ三つ

正美

身辺をすなおに詠み、春の悦びが溢れる。「思わぬところ」は、おどろきそのもの。思わず口をついた「二つ三つ」が、早春の土を擡げる、路の臺に直ひたに目を瞠る思いを伝える。「ふだん着でふだんの心桃の花」（細

見綾子)。俳句はやはり普段の目にはたとび込んだ  
“物”を詠む。あらためてそう知らせる一句である。

### ハガキ句 61 報 (’11・2・21)

ニン月の空が壊れるスカイツリー  
啓蟄や東を間違え西に出る  
春の闇をんなを吸うて膨らめる  
一木に大地を見たる枯野かな  
色鳥や今は引退氷川丸

斉藤嘉久追悼句十一句

あの世にても会ひたき人や冬菫  
末黒野は嘉久旧居まで続く  
寒鯉と手賀の翁のかくれんぼ  
一時間に一本のバス冬の葬  
啓蟄や朝よりやまぬ小糠雨  
春寒し酒と泪の成田線  
師の笑まひ童んべのやう寒の星  
天国に句友と温め酒待てり  
師の影のうすくありけり花曇  
仏となり戻らる床に今朝の足袋  
馬鈴薯を植う一語一語を置くごとく

かづひろ

孝三 啓泰 孝夫 羊三 空華 陽一 虎童子 悦子 多美子 彰一 智子 三穂 昭市 敏子 高志

### ハガキ句 61 報 管見

飯田孝三

仏となり戻らる床に今朝の足袋

敏子

故人が住み慣れた自宅での葬儀だろう。告別の間の  
床に置かれた足袋が会葬者の目を射る。葬送の形は、  
故人遺族が帰依する宗教や各地の慣習により異なると  
思うが、「今朝の足袋」は、死出の装束の一つだろう。  
それに射すくめられ、思わず身を固くしたのである。  
言わずもがな、永別の悲しみのさまが目に迫る。私ご  
とになるが、四歳に満たずに急に逝った弟の送りに、  
母が白い足袋を履かせていた光景が今も目にある。七  
十五年前のことである。

「赤まんま小さき死出の足袋履ける」

(孝三)。

馬鈴薯を植う一語一語を置くごとく

高志

馬鈴薯を植えるにつけ、故人の生前の一語一語を、  
改めて、噛みしめるのである。破調を厭わず、敢えて  
置く馬鈴薯「を」は、切々の惜情を伝え、「置くごとく」  
が植えつけの一举一道を目に見せ、今更、故人哀惜の  
深さを教える。

末黒野は嘉久旧居まで続く

陽一

故嘉久先生葬送の囑目の風景である。寡黙な客観描  
写に沈潜する別れの悲しみは深い。末黒野の青みを待  
たず、再会のかなわぬ遠くへいつてしまった。

## 寒鯉と手賀の翁のかくれんぼ

虎童子

寒鯉は、水底に潜んで身動きもしない。春になれば、浮上、また元気に動き出す。翁もきつと戻る、戻つてもらいたい。「手賀の翁」は故嘉久先生。心中、「また帰り来よ、帰り来よ」と、先生に呼びかけるのである。淡々の詠に惜情が切々である。

## 一時間に一本のバス冬の葬

悦子

故嘉久先生会葬の吟。「一時間一本」のどこかしさに、今や、それどころでない先生との隔たりを思い、哀惜の情とどめなし。「冬」は、すなわち、その真情。春の闇をんなを吸うて膨らめる

孝夫

俳句は一人称とはいえ、人間作者が女を吸うのは変だから、吸い主は「春の闇」。そこにわれを重ねる。春の闇は、沈丁花や若草、木の芽の匂いが立ちこめる、春の夜の情感の塊、輪郭がない。「をんな」は若い女性（その裸身）。「吸うて」が臍、「吸つて」では吸われて窒息する。それにしても単刀直入、春の闇に切り込んだものだ。正体見たり、をんなを吸うてふくらんだ。宜々。「をみなとはかゝるものかも春の闇」（草城）。

ところで、く膨ら「める」の潔さ、あつけらんかは何だろう。春の闇にいて、われも春の闇になりきつて、自足、いや自適のけふりは見えない。含羞の体が透けてくる。ン、何と？それは老耄の癖み？万物のいのち

粹く春の夜の賛歌に唱和、乾杯すべし？フフウム、そういうえば、連用「くめる」の余韻も、秘め事めく草城の春の闇とは対照的に、艶に弾けて、明るい。いや、待てよ、含羞、賛歌を抜き出た飄逸がこぼれるではないか。ともあれ、春の闇は、白々と、しめやかに匂い立つ。時に詩形の余白に遊ぶのも蓋し、春の夜の愉悅と言うべきか。

## 色鳥や今は引退氷川丸

かづひろ

氷川丸は、戦前日本の代表的な外洋客船。第二次戦時は病院船。戦後廃船、現在は横浜港岸壁に繋留されている。戦前、乗船客は主に今でいうセレブ、庶民には無縁船だっただろう。「色鳥」の色感が往時の栄華を偲ばせ、日夜の船内の燦きが見え、賑わいが聞こえてくるようだ。

(平23・02・26)

## お便り広場(到着順、敬称略)

拝啓 益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。

さて俳誌「飛行雲」主宰駿河岳水が病氣療養のところ平成二十八年二月十三日胃癌のため八十三歳にて永眠いたしました。生前中ひとかたならぬご厚情を賜りましたことに感謝申し上げますとともに、季刊「飛行雲」につきましては遺志に従い平成二十七年冬号をもって終刊といたしましたのでここにお知らせいたします。

す。平成二十八年二月 敬具（細川てつや）

（岳水さんのご冥福をお祈り致します。俳誌交換を五年間したことになります。岳水さんの思い出はたくさんあります。天狼八重洲句会で隣合わせに席を占めたことがきっかけで、大塚の百舌鳥句会にお出まし願ひ、一時は飛行雲の句会にもお呼び頂き、記念句会では平野ひろし主宰を紹介してくださり、今もお付き合ひできておりますのは、岳水さんのおかげであります。）

白金蔭二月号頂きました。私は一部で結構です。記念にして永く保存します。璃子さんと山尾さんに贈って頂きありがとうございます。そのうちまた梅の花でお話を伺いたいと思っています。益々のご活躍とくれぐれも御身体を御大切に。

（2・26 小山陽也）

（記念号は百部注文しました。余裕がありますので、一部と言わず数冊お送りしますので知り合いの方に差し上げて下さい。）高志さま 陽気定まらぬまゝに、花粉禍の季節となりましたが、ご健吟のことと思います。後選、鑑賞駄文をお送り申し上げます。小生の検査結果は食物の残留あり確かとは見定められませんでした、心配ないと思います。三月例会を楽しみにしています。

3・2 孝三拝

今年も早や三月に入ります。先月は（中略）白金蔭二月号受け取りました同封の手紙も読みました。私も生家を出てから六十年近くなりますので家のことは

（中略）。私も高齢になって甥のことまで考えてやる心の余裕もない。私自身今後どう生きてゆくか私なりに考えている。施して報いを求めず受けて恩を忘れず怒らず急がず悔いずありがとうの言葉が素直に言える年寄りでありたい。いくら若く見せようと思っても第三者から見れば年相応の老人なのだから、老人らしく年齢に負けない活気ある年寄りでありたいと思つて暮らしていこうと思つています。まだ車に乗れるので良いが近い将来免許証の返納も考えている。まだまだいけるとは思っているが、後悔先に立たずということもある。そう先のことまで考えずに明るく楽しく暮らしていこうと思つています。高志敏子さんあまり深く考えずにストレスをためないように俳句の友大事にゆつくり暮らしてください。先日市の埋め立て架橋などで問題になっている鞆の浦へぶらり一人で行つて来ました。雛人形がきれいに飾つてありました。地図を手に雛をめぐりて鞆の浦―右お札の便りです。敏子さん又便り待っています。高志敏子さんへ（3・1健三）

白金蔭60号ありがとうございます。頂いた頃から三月に入る迄にすることはしても、二月末にお雛様とも云えぬかも知れないものを入れて、とにかく飾り、お供えものもしてから、何となく何もする気がなくなり、のんびんだらりと春炬燵で生き過ぎを実感してお

ります。これではならじと我孫子へのお便りをと。ペンを取れば、文章にならず丸めては捨てくは何回かで失礼をしております。東京クラブ三月の兼題「義仲忌」に辟易、「猫の恋」の故か、虚子の「我が庵をゆるがし落ちぬ猫の恋」などはなく、静かなもので、気が乗らず日のみ過ぎております。桜は二十三日頃満開とか、この辺りでもピンクの美しい桜が咲いているのを見かけますし、一般にはソメイヨシノのことでしょう。今日は気象庁のご託宣どおり昼すぎから曇ってまいりました(3/5)。

日戻れば花ぐもりとや申すべき

璃子

(日戻 かたむけ)

だと思います)

猫を膝にの春ごたつより脱却すべく頑張ります。それでも三日には五目ちらしを作り、一とまたぎすれば隣の友人に桜餅と共に届け、仏壇にもお雛様にも供えただけ、やゝ、上昇気流に乗ってきたかと自己診断です。桜餅に二種あり。東京近辺、メリケン粉の水溶きを楕円形にうすく焼き、こしあんを包み、桜の葉で巻く(云わばクレープのような皮)。関西方面 道明寺(モチ米で作る和菓子材料)を蒸して、中に粒あん(こしあんのもあり)を包み込み桜葉で巻く。いずれもうす桃色のやさし色です。昔白い皮もありました。大阪奈良の友人は東京へ来て、このクレープで巻いたような桜餅を、

はじめて知ったとのこと。嵐山で道明寺だけであんの入らない桜の葉で巻いただけのもありました。皮の葉は多分大島桜とかで栽培し塩蔵すると聞き及びました。秋の桜落葉にこの匂いを感じます。以上ご存知の桜餅談義お許し下さい。新所沢駅近くの和菓子屋さん、自慢のとおり上手ながらおかみさんがこわい人で、お菓子の名を札にあるとおり、「ネリキリ」「クリムシ」「キシングレ」「ツバキモチ」「キンツバ」etc と云わず「アレ」「コレ」と云う人にいかります。私は札が無くて云えますが、「アレ」「コレ」人へのいかりをぶつけられて足が遠くなりますが、製品は「のれん街」の有名店より上等とも云えましよう。昔会社の上司に和菓子は総じて「まんぢゅう」と云う人がいました。駄文のご掲載恐縮いたしをります。ほどぐにと申し上げます。お二方様社中の皆様のご健吟を願います。

3月5日

璃子

高志様

(例の如く気が先走り呆れた字を連ね

みち様

ご読解不能かとお詫び申し上げます)

いつもいろいろと届きありがたくだいています。インフルエンザよりやっとうと治りあとは鼻だけです。レモン(広島産)の皮と汁たっぷりのマドレーヌ焼きしました。食べて下さい。マスクはプレゼントでいいで

す。(中略)ではあまり動き過ぎないで楽しくお過ごしください。

(3.5 ちる)

家の中怒声奇声の豆合戦

草太

インフルエンザ疑陰性の熱たるさ

ちる

杉花粉石をけとばし鼻すする

草太

花粉症休日なれどひきこもる

ちる

菜の花が届き生命力戻る

〃

春間近です。前山も裏山も何か色が変わって来ました。新芽が少しづつつくらんできています。先日友人と尾道市御調町の運動公園へゴルフに行きました。いろんなスポーツ施設があります。上のグラウンドでは子供達が野球をしていました。

グラウンドで声のはじける球児たち

グラウンドで声のはるめく球児たち

(春なれや声のはじける球児たち、とか、三月や声のはじける球児たち とグラウンドを省略したほうがよろしいかと。みち

遠慮せずさしでがましい事をしっかりと行って下さい。

怒りませんよ。又のお便り待っています。(3.11健三)

今月の会費+2 同封致します。古代は届くと思えます。振動の勉強は新しく四月から再開となりました。

だんだん少しづつ元気になることでしょう。五月まであと僅かご苦勞様です。呉々も御身体を大切にして下さい。部数は少し余分にしたら如何ですか？だんだん

まじめにいろいろと思っています。(3.13 小山陽也)

光成高志様 いつもお手数お世話になります。よろしくお願い申し上げます。

(平成28年3月12日めずらしく早目 青木啓泰)

寒い日が続きます。お変わりなくおすごしでしょうか。三月会報お送り申し上げます。一句句会で同封コピーの句の饅頭の神\*が気にかゝっておりまして。偶然に渋谷の東横のれん街の塩瀬で買ったお菓子のの中に入っていたカードでこの神社のことが解り拡大コピーしました。カラー写真で赤と緑の社、下部は梅の絵のようです。七〇年も前にはじめておまんぢゅうを召し上がった天皇がごほうびにお菓子屋さんに官女を賜った由。混沌の世にこんなお話し大らかですね。(倫理的には?) 御大切に。光成さま みち様3/14璃子\*饅頭の神を祀るや初雀(1/8) 輝子(奈良市在住)

先日の例会ではお世話になりました。二か月ぶり、あつという間のひと時でした。鑑賞駄文をお送りします。おっかけ、お預かりした特集号の校正稿を郵便でお届けします。今日都内では桜が開花しました。ご夫妻共々、花冷えに心され、いい句をいっぱい咲かせて下さい。 草々

(3・22 飯田孝二)

小生、昨年秋より利き手の左腕が上らず、先日の診断では頸の神経が切れていて、手術しかないけれど治



るかどうか判らぬと言われ、そんな手術はしたくないのでまあ不自由を忍んで生きるしかなさそうです。でも幸いに、というか版画の刷りが何とか出来そう、で、例年のように展覧会のご案内もさせていただこうかと思つて居ます。

(3・23 陽一)

受贈誌 (H 28年3月号)

櫂の芽の長けて不動の火炎光(彩127)

平野ひろし

絹の道糸を連ねて糸桜(〃)

〃

山国の金星爛と農歌舞伎(〃)

〃

曲水の底まで真赤散紅葉(〃)

平山三郎

大揺れの皇帝ダリヤ開戦日(〃)

小泉 博

ひよんの笛吹けば汽笛の音発す(〃)

河端不三子

石臼も露地の一景菜を干せるあすか三月号

山尾かづひろ

恋猫の敗者にひげの立派すぎ(東京クラブ3月)

璃子

蒲公英の絮吹き風に乘せてみる(〃)

理佳江

恋猫の端唄長唄ジャズロック(〃)

武子

星残し沖の明け染む春の海(〃)

文男

切り岸の梅は斜めと認めたり(〃)

万世遊

こだま

(山尾かづひろ吟行ノート2・25〜3・16)

さにづらふ少女に出会ふ斑雪村

みち

初蝶来座敷深くに紋付けて

〃

考三

世界遺産富士山背ラ白子干す  
雪国のはだれ一閃新幹線

〃

築地市場白子売場の清潔感

高志

白箱に容れて白子の売られをり

〃

春泥に筵敷かるる道めぐる

みち

春愉しポニーテールの運転手

〃

啓蟄の犬道草土を嗅ぐ

孝三

白鳥帰る蹊水面ばしやらばしや

〃

鏡石真直ぐ立つて日脚伸ぶ

高志

蓬萊梅咲けり大観音前の

〃

芭蕉の軽み以後 (47)

光成高志

そこで、(無抵抗主義・反戦主義の思想家) 宋栄子(ソウエイシ)は、ニタリニタリと、(世間の価値づけに一喜一憂する、善良なる常識人である) 彼らを冷笑するのである。そして、世間のすべての人々に誉められても、そのためにさらに励むということもなく、世間のすべての人々に誹(そ)られても、そのためにがっかりするということもなく、世間の毀誉褒貶に心を動かされず、おのれに本質的なもの(内)と然らざるもの(外)とを見分け、人間にとって何が真の榮譽であり、何が真の恥辱であるかを明らかにするだけの主体性を、いちおうは持つた人間である。そしてその意味では宋栄子は世俗を超

える（あくせくしない）人間である。しかしそれはあくまで、それだけのものであつて根本の確立したものではない。宋榮子は世俗を笑いながら、なお世俗にこだわる場所がある。彼の足はなお世俗を離れていないのである。眞の超越者は現実を飛翔するのである。列子は風にうち乗つてかけめぐり、軽やかですばらしい。（風が変わる）十五日がたつて、はじめて戻ってくる。彼は世間的な幸福の追求に汲々キウキウとしていない。これは自分で歩くわずらわしさから解放されているという点では宋榮子よりもすぐれているのであるが、まだ頼みとするものを残している。列子の飛翔はなお風に依存し、彼の超越はなお外に在るものにとらわれている。つまり彼の超越はまだ眞に自由自在な絶対の境地には達していないのである。ところが天地の正常さにまかせ自然の変化にうち乗つて、終極のない絶対無限の世界に遊ぶ者ともなると、彼はいったい何を頼みとすることがあるだろうか。彼は、大自然の生成変化の極まりなきごとく、一切の時間と空間を超えた絶対自由の世界に逍遙するから、何ものにも依存することなく、何ものにも束縛されることがない。そこで、「至人には私心がなく、神人には功績がなく、聖人には名譽がない」というのである。つまり絶対者は世俗を遙かなる高みに超えるから世俗的な自我にとらわれ

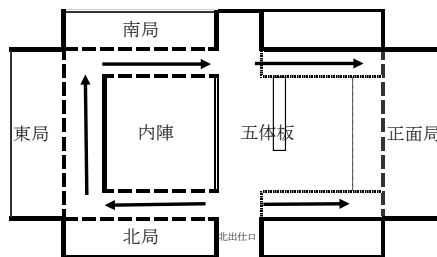
ることも、世間的な価値に左右されることも、人間的な言葉によつて榮誉づけられることもないのである。

このような莊子の云わんとした自由無碍の心の世界は、逍遙遊第一にも書かれている。樗オウという大木があつて、それを使いようがないとご心配のようですが、どうして、それを物一つない世界（無何有ムカユウの郷キョウ）、人ひとりない広漠の野の真中に立てて、その側カタわらに一切の人間的なものを超越して自由なる孤独を彷徨し、その下に満ち足りた安らかさをねそべつて豊かな生の充溢を逍遙しないのですか。世間から無用のレッテルをはられ、大工から見捨てられたこの樗の大木は、自己の天然のよわいを全うして、斤斧すなわち、まさかりやおのに切り倒されることもなく、すべての物から安全な自己を確保するでしょう。世間的に無価値とされるからといって、何も気に病むことはないではありませんかと、この莊子の言葉はその時の芭蕉の心を揺さぶつたことであろう。先の短い判詞の裏にこれだけの思想があるのであつた。これが今の私の心だという芭蕉の声が聞こえてくるようだ。

## 修二会参拝紀行＊4

光成高志

お水取りの兼題を出しておいてそれを見つけたことがない。かねての思いを達するべく奈良まで出かけた。



一寸下調べしたら、お水取りは修二会の一つに過ぎず、お水取りを見る前に修二会を見なければならぬと気づき、修二会に参じた。芭蕉の水とりやの句は、修二会全体をさしているのだ。祈祷申込みにより送られてきた参拝許可書を持って二月堂を仰ぐ階段下に八日の日暮れに着いた。

裏門に控への松明修二会待つ みち

お松明が終わったら北出仕口から内陣に入れる。観光に来た人々はお松明が上がって消えたら皆帰る。19時から30分もたたぬうちに終わるお松明。

お松明スマホの灯り点々と 高志

お松明大きな玉不意に落ち //

内陣に入ったのは19…40頃。薄暗い廊下を奥に入って南局の前で止められた。中は学生さんで一杯、ここでと作務衣を着た童子に言われ着座。後ろは誓子先生の句の通り格子戸になっており、よく見ると女人の目が一杯こちらを向いていた。

修二会の棧江戸の牢屋の太さかな みち

内陣の洩れ灯女人の修二会の座 //

須弥壇周りには灯明がともされ廊下の四隅には電灯が点っているので真つ暗ではない。薄暗い灯りを頼り

にせかせかと手帳に書きつけていたら、童子にここは祈る場所で見学場所ではないと注意された。須弥壇も部分的な格子戸で囲まれており、中は見えない。皆見えない壁に向かって声明を聴くだけだ。

局にて修二会の気配感じをり みち

男にて修二会に少し近くゐる 高志

鏡餅ピラミッド形に供えられ //

聲明にサンゲサンゲとある修二会 //

聲明の最高潮に修二会更け //

手洗いに立ったら外でみちさんに会った。らしき者が出て行つたので局から出たという。再入場は20…30。

法螺貝の響く時なり修二会更け //

学生達が出て行つた席にどうぞと言われたので、始めから座禅僧のように動かなかった僧二人とともに、

広い正面の五体板の置いてある部屋に入る。畳の幅より絶対に前に出ないように言われて畳に座れた。

ソロの僧舌繰る経の修二会夜半 高志

聲明が大和言葉に修二会夜半 //

修二会更け休息に出る僧拝む みち

21時過ぎからよく聞くと人の名前が読み上げられているのであった。どうも祈祷料を払った人の名前らしい。最初に、内閣総理大臣云々とあり、次々に大臣の名前が読み上げられあとは、べらぼうな早口でしゃ

べり息継ぎの語尾が「となーり」となり、すぐ早口が繰り返される。もう聞き取れないので退場した。22時前にはみちさんの案内で参籠休憩所に入り只の湯茶を飲み壁に貼ってある資料やら籠松明をみたりして宿に帰った。東大寺二月堂の修二会は、天平勝宝4年(七五二)、東大寺開山良弁僧正の高弟、実忠和尚が創始され、以来、今年で二二六五回を数えること、正式名称は「十一面悔過けか」と言う。十一面悔過とは、われわれが日常に犯しているさまざまな過ちを、二月堂の本尊である十一面観世音菩薩の宝前で、懺悔さんげすることを意味することなどを今更のように知った。みちさんの知り合った女性は何回もお参りして1日から14日まで全部来たとか、そういう複雑な行法がある修二会を芭蕉は「氷の僧の沓の音」でひつくるめて象徴的に俳句にしたのである。この句に尽きると思った。更に俳句はあくまで文芸、宗教は宗教自由ではないと思った。

### 我孫子日記

＊菜の花が届き生命力戻る

杉花粉石をけとばし鼻する

鳥曇ピカソの目鼻点四つ

ちる 草太 高志

	2/19 例会
＊	青砥→ピカソ展
＊2	2/29 ウオーキング講座(増田明美)
＊3	3/4 隣の犬と散歩
＊4 ＊5	3/8～3/10 お水取り・法隆寺/中宮寺
	3/18 例会

鑄造の花の咲く如雨露しやうろ鳥曇

みち

＊2 鳥曇水天宮は建替え中

高志

＊3 いぬふぐり犬の欠尿きりもなし

〃

初雲雀白鳥二羽ある川の上

〃

＊5 春の雨激し中門はリフォーム中

〃

五重塔堂寝釈迦に阿修羅涅槃哭く

〃

春がきて太子二歳像にまた出会ふ

みち

法華義疏板木にある春の影

〃

観音のやや笑み給ふ春の雨

高志

のびやかな百済観音春灯

みち

橘夫人ぶにん念持仏の正面に回り

〃

中宮寺裏庭ありて桃の花

高志

### 編集後記

五十四年ぶりに法隆寺・中宮寺を訪ねた。夢殿の救世観音は春秋の彼岸の数日のみ御開帳により拝観できる。モナリザを昔見たように頭越しにちらつと見られるだけらしい。それでも拝観したい気持ち痛切である。その日を目標の一つにして生きて行こう。昭七さんのエッセイは今回は編集上割愛しました。次回以降載せます。五周年記念号は初校の校正を終わり、装丁と三校に向かい五月末には完成します。祝賀拡大句会は六月三十日に設定しました。